能登の舞台と民譚

西山郷史

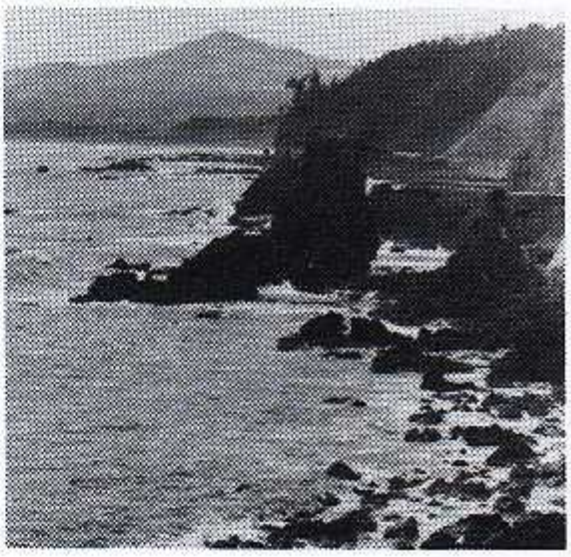
豊臣秀吉の越前、北の庄（現在武生市・柴田勝家の城）攻めの最中、秀吉方に逃れようとした勝家夫人「小谷の方」を刺し殺した後、前田利家への使者となり、居合せた秀吉に切りかかって捕えられ、危い命を許された「小侍従」が行方知れずとなったのは、北の庄が煙に包まれた時であった。鏡花の『秘妾伝』の前半部である。のち佐々成政が能州、羽咋郡押水町、末森城を攻めようと、宝立山中に迷った時、道案内を命じた「神か、仏か、はた妖か」という美女が、再び登場する「小侍従」であった。

佐々軍を山中に置き去りにし、恩義ある前田利家を救おうと末森城へ、さらに尾山（金沢）へ走るなど、女とも思えぬ活躍をする姿には、戦乱の世を生きる女の壮絶な美が満ちている。利家は「小侍従御身が此度の功労はそも我いかにして報いんか」「君妾を妾とせよ（私を側室にしてください）」。利家は「可」と肯き「秘せよ、然らざれば人は我を以て色を愛づるとせむ」……「此秘妾後一子を設く。」これが加賀三代藩主、前田利常だという。利常の史実上の生母、寿福院は越前の人であるが、それとは別に「能登、羽咋郡志賀町徳田出身の〝おりん〟が生母だ」という口伝が口能登に伝えられている。

『河伯令嬢』は、瓜細工を得意とする飾職人、小山夏吉が、羽咋郡大笹の旅館で、藩政期の俳人、可心が書き残し副題に「河裳明神縁起」とある「能登路の記」を見る所から始まる。その昔、金石往還で心中しようとして失敗した夏吉と、その恋人「優」はふとした出来心で畑の瓜に手を出した所を見つけられてしまった。夏吉は逃げ帰り、お優は六人の番人に捕まり手ごめにされ、行方不明となった。

後、男達六人は次々と死んだが、それはカワスソ明神の罰だといううわさ。悔恨と恋しさから「優」に「めぐり合って、しめ殺されたい」と願い、ずっと一人身のまま諸国を旅し、とうとうここで「恋人にめぐり逢ふ道しるべの地図」（可心の書）を見つけた夏吉。大笹にある「艶麗龍女の如き」女神、

川裳明神の縁起には、可心を救い、身代わりとなって海に死んだ貧しく優しい能登女の物語があった。くしくも、夏吉の旅と、時を隔てた文政期の可心の旅は、能登の浦伝い、輪島街道をそれぞれ逆にたどり、自分のために女を犠牲にしたという同じ苦しみで符合する。翌日、明神を祀ってある、可心が終生、堂守をした寺で夏吉は美しい女に会う。「連れていって下さい。お優さん、めい土へでもどこへでも。」「お帰りなさい――私が一緒に参りますから。」そこで夢が覚めた。一昨年、この地で投身自殺したという「肉(み)を売る」年増女がお優であった。そして先ほどみた美人はその亡霊であった、と夏吉は確信する。そして可心と同じように自分も死ぬまで女の菩提をとむらう生活に入ることになる。

作中、能登海岸の美しい描写もさることながら、民間に流布する義経伝説や俗謡が巧みに織りこまれているので、能登全体が時間を越えた〝異界〟、伝説の地のように感じさせられる。そこを舞台に男達や女達が優しさを競い合うという趣向は絶妙である。

金沢生れの鏡花にとって、能登は異郷であり、作品も伝聞か紀行体裁のものになるが、『山海評判記』の主人公、矢野も旅人である。矢野は「長太おるか」と呼ぶ怪異に会うが「長太貉(むじな)」は、輪島市大沢を中心に、真宗の唱導で能登一円に広められている民譚で、夫を殺された牝貉が化けて、猟師の長太に復讐しようとする話である。この作品には白山信仰から出発した民間信仰がたくさん織り込まれている。ところで、鏡花の描く〝聖なる女〟は、恐さと優しさの二面を兼ね備えているが、連想されるのは、「能登はやさしや土までも」と「能登はやさしや人殺し」という口伝えである。相違しているようにも思え、同じ事を言っているようにも思えるのだが…。鏡花作品と似通っている。